

歌集『あかね雲』より（八）

登美子

声揃えブランコ漕げる子供等の重みに

折れんばかりに柱木揺れており

祇園小径を歩く人道を譲りて我に会積する

愛すとも言わず過ぎこし五十年なれど

我等は心を知りぬ

裏庭に死骸のありし夢を見て

うなされおるを夫に起こされる

ここが棲剣先八ッ掛けと言うわれに

繰り返し出す細き孫の手

着物など興味無きかと思いきに

繰り返し出す細の孫の手

一ひらは小さき欠片の雪なれど

一夜の中に丈と積もれり

伏して咲く野葶^{のオミレ}習えと言いし母

恋いつつ今日も畑打ちおり

電線に止まりて動かぬ群雀

楽譜と読みて小窓に眺む

落蟬を草に戻せば複眼に

ちからのありて我は見られる

起重機の運転したる乙女子は

太き木材トラックに積む

早々と暮れなずみゆく伊吹峰に

色鮮やかなグラライダー舞う

秋茄子の見栄えせぬとも捨て難く

今朝も糠床に入れておきたり

草刈りて進みし畦のカマキリに

拝まれ笑いて一服しておりぬ

闇の夜にふと怯えおり

年々に子供に還りゆくらし吾が心に

講帰り話弾みて軒端に

集いて円座組にて話しぬ

風まかせすすきコスモス大揺れす

丘ごと動くかに思い眺める

行き降る夜帰らぬ兄の靴音の

聞こゆと言いし母の五十回忌

細き杖に一つ咲きたる白椿

屈みて物言う母の如きに

心にもなき事よりも心より

本心告げくる友の頼もし

満月の輝く面に影見えて

我が煩惱を映すが如し

岩の如静かなりたる石なりき

微笑む遺影我を見つむる

いつの日か別れアラムと思いつつ

時には腹立て悔いを残しぬ

かろうじて賀状がつなぐ絆とて

中学の恩師今逝き給いぬと

伊吹路は自然満つれど

変速の自転車に乗りても登り難くて

私の作りし小松菜は

いくつも穴あきレース仕立てよ

